

令和4年度 長崎市平和式典 派遣者報告書



船 橋 市

目 次

1. はじめに	1
2. 平和都市宣言文	2
3. 派遣スケジュール・行程表	3
4. 派遣者名簿	4
5. 派遣場所の報告	5
6. 派遣者の報告（感想文）	10
7. 事前説明会及び市長報告会の様子	20
8. 平和祈念式典報告	21
9. 平和祈念式典式次第	23
10. 長崎平和宣言	24

は じ め に

昭和20年8月6日に広島、9日には長崎に世界で初めて原子爆弾という兵器が使われ、多くの尊い生命が一瞬のうちに奪われました。あの日から77年が過ぎました。

いま、戦争体験、被爆体験をされた方が少なくなっていく中で、戦争や原爆の悲惨さ、世界の恒久平和がいかに大切かということを、次世代にどう伝えていくかが大きな課題になっています。

船橋市は、昭和61年12月に、世界の恒久平和を願うとともに、核兵器の廃絶を目指して「平和都市宣言」を行いました。これを機に、毎年、平和の集いや平和写真展、そして広島や長崎で行われる平和式典への市民の派遣などの事業を通して、市民の皆様と一緒に平和の尊さについて考える機会を作るという取り組みを行なっています。

平成5年から始めたこの平和式典派遣事業も今回で28回目となり、今年長崎市に派遣した6人を含め、これまで延べ268人の市民を派遣してきました。

この報告書は、今回長崎へ派遣されたこれからの船橋を担っていただく若い世代の皆さんが、現地で実際に肌で感じた貴重な体験を取りまとめたものです。市民の皆様には是非御覧いただき、平和の尊さ、戦争の悲惨さについて語り合っていただくことで、平和式典派遣事業の意義はさらに深まるものと考えています。

船 橋 市

平和都市宣言

船橋市は、現在人口五十一万を擁する首都圏有数の中核都市に成長し、第二の飛躍期を迎えている。そして、「活力ある近代的都市」を市政の目標に掲げ、より豊かな福祉社会実現のため懸命な努力を続けているところである。

しかし、郷土船橋の限らない繁栄は、日本の安全と世界の恒久平和なくしては望み得ないものである。

私たち船橋市民は、世界の恒久平和を願い、我が国の国是である非核三原則を遵守し、平和を脅かす核兵器の廃絶を目指して最大の努力を払うことを決意し、ここに「平和都市」を宣言する。

昭和六十一年十二月十九日

船橋市

《派遣スケジュール》

4 月	派遣者公募
7 月 2 2 日	説明会 ～行程説明、自己紹介等～
8 月 8 日～1 0 日	長崎市派遣
8 月 2 2 日	市長報告会及び平和式典派遣者報告準備
1 0 月 1 5 日	平和式典派遣者報告（「平和の集い」において）
1 2 月	報告書完成、公表

《長崎市平和式典派遣 行程表》

8 月 8 日 (月)	JR 船橋駅（集合）－羽田空港－長崎空港－現場学習（平和公園・浦上天主堂等）－ホテル
8 月 9 日 (火)	ホテル－長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典－被爆体験講話－長崎原爆資料館・長崎原爆死没者追悼平和祈念館・長崎歴史文化博物館－ホテル
8 月 1 0 日 (水)	ホテル－長崎空港－羽田空港－JR 船橋駅（解散）

《派遣者名簿》

	氏名	性別	学年等	担当
1	ふじい ゆい 藤井 雪衣	女	高校1年生	班長
2	いづか ひまり 飯塚 ひまり	女	高校1年生	副班長
3	おこいん けん オコイン 健人	男	中学3年生	報告書担当
4	きむら ゆか 木村 結花	女	中学2年生	式典報告担当
5	ひろみ かなめ 廣海 叶夢	女	中学1年生	写真担当
6	ひらやま あきら 平山 晃	男	原爆被爆者の会	



(令和4年8月9日 平和公園にて派遣者集合写真)

《派遣場所の報告》

浦上天主堂



長崎市本尾町に1895年にロマネスク様式の大聖堂として建築され、東洋一の大教会として、長崎市内のキリスト教信者らによって篤く信仰されました。

この大教会は建設当初、大勢の信者によって建立されるも1945年8月9日、原爆投下によって一部を残し倒壊しました。

そして1959年、鉄筋コンクリートで再建され、さらに1980年、外装をレンガタイルで装飾し、現在の美しい状態になりました。



旧浦上天主堂遺壁

旧浦上天主堂は原爆によって一部の壁と鐘楼を残し倒壊しました。また浦上天主堂を再建するにあたり、壁の大部分が壊されたため、現在残っているのはこの壁と鐘楼だけとなっています。そのためこの遺構は原爆の威力を伝える貴重なものとなっております。



によこ 如己堂



永井隆は1908年に島根県松江市に生まれました。そして1928年に長崎医科大学（長崎大学医学部）に入学、1933年に満州事変に従事、カトリックの宗教書を読み感銘を受け、帰国後洗礼を受けました。また1944年に医学博士号を授与されました。その後レントゲン医師と

なるも乾板不足から直接レントゲンを見続けたため白血病となりました。1945年8月9日自身も被爆し重傷を負うも、救護活動に専念しました。1946年になると病床に伏すことになりました。その後1948年になると浦上の人たちの協力により療養を行う庵が出来ました。この二畳の建物を彼は「己の如（ごと）く人を愛せよ」という言葉から「如己堂」と名付けました。そしてこの庵の隣には彼の思想を世に広めるための永井隆記念館も併設されています。

一本柱鳥居

山王神社には4つの鳥居がありましたが、爆心地より800mという位置にあったため2つが爆風とともに倒壊しました。

元々は一の鳥居も残っていましたが1962年の交通事故で倒壊し、この二の鳥居を残すのみとなりました。



山里小学校



爆心地から北へ600mのところにあり、コの字型の鉄筋コンクリート造3階建てで、現在建て替えられた校舎の運動場にあたるところにありました。しかしこの校舎の南側は爆風により3階が崩壊し、火災により校舎北側の1、2階を残し内部は全焼しました。この日在校していた32人のうち生存者はわずか4人で、28人が死亡しました。また児童1,581人のうちおよそ1,300人が自宅で死亡したと推定されています。現在、小学校は建て替えられ、校舎の横には原爆資料室があり展示品の中には当時の学校の写真や吹き飛ばされた階段の手すりなどがあります。また校舎の周りには20数か所あった防空壕のうち3つが展示されています。

長崎の鐘

原爆投下から33回忌となる1977年に建立された鐘です。被爆地である浦上には軍需工場があり学生や女性が働いており被爆で亡くなりました。この鐘は軍需工場で働いていた人々の慰霊のためのモニュメントです。



平和祈念像



1955年北村西望（本名：きたむらにしも）により制作された、全高9.7m、重さ30tの像です。

像の顔は神の愛と仏の慈悲を、天に垂直に伸ばした右手は空からの原爆の脅威を、水平に伸ばした左手は平和を、立てた左足はすぐに救護へ動く姿勢、あぐらをかいた右足は瞑想する静けさ、軽く閉じた目は戦争犠牲者の冥福を祈っています。

爆心地



平和公園内にある石碑は4回の建て替えを経て今の形になっております。1945年10月に井樋ノ口交番所のひさしの影、浦上天主堂の石碑の影、長崎医科大学付属病院の焼け跡で見つけた影の三方の影から爆心地を測定し松山町170番地高見別荘テニスコートの上空 490 ± 25 mと確定され以降そこに碑が建てられています。

最初の石碑は1945年煙突の残骸の円柱に「爆心」「Centre (Center と同義)」と書き残したもの。

現在の石碑は1968年に蛇紋岩の表面であったものを黒御影石に張り替えたものが建てられました。



長崎原爆資料館

1949年に原子爆弾の恐怖を後世に伝え、長崎市民の平和への願いを広く内外に伝えるため設立されました。当時は六角形の平屋造りの建物でした。そして1996年6月に現在のものに建て替えられました。資料館内は様々なテーマに分けられた展示があり、ファットマンの模型、被爆者の写真、被爆外国人の証言など歴史的にも保存価値の高いものがあります。



(長崎原爆資料館所蔵)



(被爆体験講話を聞く派遣者一同)

《派遣者の報告（感想文）》



派遣事業を通して感じたこと

藤井 雪衣（高校1年生）

実は昨年も応募したのですが、残念ながら中止となってしまったため、派遣事業に参加をすることは2年越しの願いでした。

資料館や被爆被害について、インターネットなどで事前に少し調べていたのですが、実際に見学をすると、想像していた感覚とは全く異なるものでした。

山里小学校にある防空壕を見たときは、あんなにも暗くてとても狭いところに、たくさんの大人と子供がぎゅうぎゅうになって集まっているところが浮かびました。命が奪われるかもしれない、家族や友人などともう会えなくなってしまうかもしれないという恐怖心のなかで、寄り添いあって身を隠していたと想像すると、命を落とした人も、被害にあったけれども一命をとりとめた人も、心と身体に想像を絶する痛みと苦しみが戦争や原爆によって刻み込まれたと思います。

また資料館で原爆投下の前と後の写真を見たときは、あまりの原爆の威力に、本当に投下後の写真の場所に人が生活していたのかと、頭では理解していても感情がついていかなくなってしまいました。

実際に被爆した方の講話を聞く機会もありました。活字や資料ではなく、本当の生きた声で経験談を聞くことができ、一層現実起こったことと感じました。講話の終了時間が来てしまった時は、まだ話したりないという講話された先生の気持ちが伝わりました。

平和式典では、小学生から高齢者までのすべての年齢で参加者がいました。式典準備や歌、様々なことで毎年多くの時間を使って準備をして当日を迎えていることがよくわかりました。長崎の人たちは日常として式典準備だけではなく、平和について考えることが当たり前の環境となっています。

私も今回の派遣事業をきっかけに、平和について、世界で起きている戦争について、8月だけではなく、また特別ではないこととして受け止めて考えていこうと思います。



明日へ

飯塚 ひまり（高校1年生）

1945年8月9日午前11時2分、長崎上空で一発の原子爆弾が炸裂し、多くの命とその日常を奪いました。それは77年経った今に生きている私たちには簡単に想像できる出来事ではありません。しかし、想像できなくても知ることや伝えることなどその他の多くのことができるのだと、8月9日の平和式典や現地に行って様々なお話を聞かせていただくという貴重な3日間を通して改めて考えさせられました。

何事も自らの肌で感じる事が大事であるとはよく聞きますがまさしくその通りだと今回ほど強く思ったことは無かっただろうと思います。

私は長崎に行って木々の緑が青い空に映え真夏のまぶしい日の光が地上を照らし多くの人たちが日常に生きている姿を見ました。みんな「ここ」に「いま」に生きていました。その光景を見て原爆で亡くなった方々もあの日の「ここ」に「いま」に生きていたのだと知りました。普通に考えればこれはあたりまえのことかもしれません。だって彼らは生きていたのですから。

けれどそれを私たちは長崎の美しい土地を見て思うことができるでしょうか。幼い頃から両親や学校などより「戦争で使われた原爆によって長崎や広島はほとんどが破壊され、多くの人たちが亡くなってしまったのだ」と教えられてきたとしてもそれを本当に起こった事実であると理解できるでしょうか。

人は忘れっぽい生き物だとよく言います。さっきしようと思っていたこと、昨日の夕飯、そして77年前のあの日の出来事。全て過去のこと終わったことになって忘れていってしまう。でもそれらは決しておぼろげな記憶や記録のものではなく、あの時確かに起こり存在していたことなのです。

私も資料館や遺跡などを見て全てをそうだと理解できたわけではありません。それでも長崎の土地に自分の足で立って肌で風を感じ画面越しではなく自らの両目で視た経験は私の理解や考えを深めてくれました。

月日は流れ時代も変わりあの日起きた惨状は「過去」のものへと成りはじめてるように感じる今、私たちは私たちのできることをしなければなりません。

物事には必ず始まりがあって終わりがあります。むかしむかしで始まり、おしまいで終わるこれは現実の世界だってそうです。だから私たちは若い世代が先頭に立って原爆を終わらせないといけないのです。核が在り、核保有国が存在する限りあの日始まってしまった出来事は終わらないのだと思います。だから、平和という人類が望んで止まないものは絶対あるものではなく、それは私たちの一歩に在るのだ。その為に核を廃絶しなければならないのだ。と声を張り上げねばなりません。

これからは、何気ない今の日常に感謝し、今回の貴重な経験を胸に刻んで伝え続けていこうと思います。

世界に平和を。

あの日に終わりを。



初めての被爆地訪問

オコイン 健人（中学3年生）

「この様なものは、もう使われてほしくない。」そう、我々に訴えたのは原爆講話で壇上に立った羽田麗子さんでした。

羽田さんは、小学三年生の時に被爆しました。お寺で勉強を終え玄関の前に着いたときでした。ガラガラした光が目の前を走り、直後に辺りを白い光が覆い大きな音が理解する暇もなく襲って来たと羽田さんは語ります。

当時は米軍の新型爆弾が使われたということ以外、情報がなく長崎に投下されたものが、原子爆弾だと知るのは九月の中頃になりました。

また、羽田さんは長崎経済専門学校の講堂で怪我人の介助をしていました。運ばれた人は、みな虫の息で水を嚥下した途端に目の前で亡くなった人もいたそうです。そのため、講堂内は亡くなった人の亡骸で溢れかえり、夏であったため、虫などが湧いていたそうです。しかし、汚いなど思わなかったそうです。羽田さんの話は迫力があり原爆が長崎に与えた被害は私の想像をはるかに超えていて改めて核兵器の怖さを知りました。

そして、原爆講話の後に向かった原爆資料館ではよりその恐怖を間近で見ることとなりました。展示品の中には熱線で沸騰した瓦や溶けたガラスがあり、物質が形を変えてしまうほど熱線の温度が高かったことが伺えます。資料館で私が最も印象に残っているのが『女子学生の弁当箱』です。これは、爆心地から約700mのところで被爆した堤郷子さんのものでした。弁当箱の中の米飯が、火災で黒焦げになってしまったものです。私は、これを見た時に原爆というのは、子を想う親の気持ちでさえ無情に取り去ってしまうのだと思いました。

また、原爆の恐ろしさは町を破壊し、人々の日常生活を一瞬にして奪いつくした後も、原爆による様々な放射線障害があったことが資料館の展示にありました。

展示の中に髪の毛が抜け落ちた少女の写真や36倍にも肥大化した脾臓などがあり、原爆は、すべてを破壊しつくした後ですら、人々に危害を加える恐ろしいものであることがわかります。様々な経験をした長崎で私は原爆の恐ろしさ、平和の尊さなどを学ぶとともに言葉によって被害を語り継ぐことが大切だ

と感じました。というのも長崎には原爆の被害を伝える広島県原爆ドームのような遺構が残されていないと感じたからです。最後に原爆の使用には様々な意見がありますが、過去について、あれこれ言うのではなく、今生きている人や未来の世代が核兵器と戦争によって命を落とすことが無いような世界を作りたいと思います。



語り継いで

いかなければならない平和

木村 結花（中学2年生）

「水を、水をくれ・・・」と言って亡くなった人の言葉。その言葉をゆっくり丁寧に話して下さる被爆者の体験した講話を私はまるで戦争を経験したかのような気持ちで聞いていました。

私は今回、長崎の平和式典派遣事業に参加し、とても貴重な体験をさせていただきました。

一日目の体験で一番印象に残った事は、山里小学校のこげた階段の跡。これは、原子爆弾の恐ろしさを物語っていました。人や物を簡単に焼いてしまう恐ろしい爆弾だと思いました。また、戦争中に使われていた防空壕なども残っていて、空襲から逃げる人の悲しさなど戦争のことを更に深く知り想像させられました。

二日目は、平和祈念式典に参列しました。とても貴重な体験だと思い、しっかり目に焼きつけてきました。式典の中で、被爆者の方が原爆の恐ろしさや平和を守っていく事の大切さなど過去の事から未来の事まで語っていて、私は過去に起きた戦争を決して忘れてはいけない、この先いつまでも平和が続いていくことを願って語りかけているように感じました。改めてお話を聞き、戦争の悲惨さ恐ろしさに胸が苦しくなりました。この日の事は私の中で忘れられない日になりました。

また、原爆資料館へも行きました。戦争を知らない人もそこへ行ったら戦争の恐ろしさが分かります。そこで私は一つの家族のストーリーを見ました。子供が家の下敷きになり、お母さんが子供を見つけ助けようとしますが、なかなか抜けず、お母さんはすごく涙を流しながら歩いていくしかなかったのです。幸せな家族が一瞬で、たった一つの爆弾で壊れてしまうのです。私はもう二度と戦争をしない平和な世界にしていくには、このような歴史や真実を知り、この先も戦争の恐ろしさや平和の大切さを伝え続けていかなければならないと思います。

最後にこのような貴重な体験をさせて頂きとても感謝致します。



もう二度と

廣海 叶夢（中学1年生）

「もう二度と作らないで、私たち被爆者を」

これは8月9日の平和式典で被爆者による合唱団「ひまわり」が歌った「もう二度と」の歌詞の一部です。「ひまわり」の方々の優しく温かい歌声のなかには「原爆を使ってはならない」という強い思いと、深い悲しみ、苦しみが感じられました。全力で私たちに原爆を使わないように訴える「ひまわり」の方々を見て私は今までの自分が恥ずかしくなりました。一冊の本で原爆について知った気になり、少し考えただけで分かったような気分になっていた自分がどれだけ甘かったのか知ることができました。

式典後、私たちは講話を聞き、長崎原爆資料館を訪れました。講話を聞いた時、その被爆者の悲惨な体験に言葉を失いました。講話の一時間は今までとは比べものにならないほど近くに原爆の恐ろしさを感じた一時間でした。長崎原爆資料館では血の付いたベルトや黒こげになってしまった少年の死体の写真など多くの展示品を目にしました。その中でも、道で被爆して亡くなられた母子の写真を見た時、どうしてただ一生懸命に生きている人の命を戦争は奪ってしまうのだろう、と悔しく思いました。そして、たった一つの原爆で何万もの人が亡くなったというのがどういう事なのか実感がわいてきて鳥肌が立ちました。

さらに、空襲による被害が比較的少なかった長崎に原爆が落とされた理由が原爆による被害を確かめたい、というアメリカの考えだったと知った時、私の中に怒りに似た感情がうずまきました。戦争は人が人でなくなってしまうもの、という言葉の意味が分かった気がします。

人が亡くなるのは悲しいことです。人の命は戦争の勝ち負けを決めるための駒ではありません。しかし、人の命を簡単に奪ってしまう核兵器は、世界各国に一万個以上あります。恐ろしい兵器がこれほど存在していることは、いつ、私たちの平和が壊されてしまうか分からないという事です。

戦争、原爆を知る人が減ってしまっている今、私たちが平和を受け継ぐ必要があると思います。平和への思いを内に秘めるのではなく、友達や家族と話し、

願い続けます。

小さな力だけど無力じゃない。きっと平和をつないでいくことができると私は信じます。



(令和4年8月8日 平和公園にて派遣者集合写真)



長崎原爆資料館

平山 晃（船橋市原爆被爆者の会）

今回、船橋市による長崎平和式典派遣事業で5人の中高生と参加する機会を得ました。参加には、幾つかの不安と確かめたい事がありました。

一つには、こんなに若い人に、あまりにも残酷なものを見せても良いのだろうかという不安。なぜ、原爆に興味を抱いたのか、不思議な気がする年齢の5人でした。

もう一つは、私が生まれた直後、熊本から戻った父が、爆心地で被爆者の救出をしていたと話してくれたことでした。

「長崎原爆資料館」に父の夏用スーツはまだそこに展示されていました。

母と姉は防空壕へ避難した家に、ピカドンの暴風が屋根を吹き飛ばし、箆笥の隙間から侵入した光線は、当時珍しかった自慢のサングラスをさした夏用スーツに傷跡を残しました。



（長崎原爆資料館所蔵）

当時の父は所謂モボ（モダンボーイ）だったそうです。長

崎市職員であるモボの父が遺体を抱き上げ背負い、なりふり構わない救出作業だったそうです。丁寧にしないと崩れたそうです。おそらく素手でした。

人間が蒸発した場所から数百メートル離れると炭化した焼けただれた遺体、水場に折り重なるグズグズの遺体、かろうじて息のある方、この方々もまもなく亡くなって遺体だけが折り重なっていたそうです。

遺体約74,000体、負傷者約75,000人。しかし、救出に当たる人たちは数が限られています。1日や2日で終わるわけではありません。遺体はすぐ腐敗するのでなんとかする必要があり、火葬に頼るしか無かったそうです。

ピカドンの話を被爆者は話したがります。しかし、私たちの幼いころ、行き合う人に顔半分赤黒いやけど跡の方がたくさんいたし、銭湯に通っておりま

したので、体の多くの部分が同じように赤黒いやけど跡の方がたくさんいました。

ただ、子供心には可哀そうだとしか思いませんし、そういうものとしか考えられませんでした。

「残酷な話バイ 夜に ワルカユメば 見るごたる話ヤカネ きりんなかった作業やったばい もう良かやろ」と話を止めた父でした。

当時来日した日系米人医師ジェームズ・ヤマザキ氏の記録によると負傷者は救援を2週間待ち火葬や埋葬もそれくらい続いたと報告されています。(この方は、子供たちの先天性奇形に関する調査で来日しました。)所謂A B C C (原爆傷害調査委員会)です。

最初の疑問、5人の中高生が何故こんな残酷なものを進んで見ようとしたのか。疑問は簡単に吹っ飛びました。彼らは、真正面から物事を見てくれました。

戦争というものの悲惨さなどについては、知識があるようでした。

最も悲惨な原爆による被害について、自分の目で確かめようとしていたのです。

語り部の方の話を非常に熱心に聞き、メモを取りながら、大きくうなづく純粋な姿は、少し自分が恥ずかしくもありました。

我々被爆者でも、目を背け涙なしでは見られない実物の展示。その一つ一つを綺麗な目で見てくれました、本当にありがとう。

昭和61年に「平和都市宣言」をした船橋市、今日まで続けてきていることは、非常に誇れることであり、私たちみんなで守り続けなければなりません。

船橋被爆者の会には、広島の被爆者 岩佐幹三前会長のお話を金沢市の小学生が絵にして、紙芝居にしたものなどわかりやすい資料もあります。いつかご披露できればと思います。

参加してくれた5名の中高生の皆さん、この暑かった夏、炎天下の長崎体験を共に伝えていって欲しいと思います。

私は船橋市にまっすぐ前を見ることが出来るあなた方が居ることを誇りに思います。この子たちを育ててくれたご両親に感謝します。

本当にありがとうございます。

今が本当に平和かの確信はありませんが、脅威は確実にあります。

今、そこにある核を廃絶させ、戦争の無い世界を目指しましょう。

《事前説明会の様子 令和4年7月22日》



長崎市への派遣者計6名が初めて顔を合わせました。

派遣者の自己紹介や派遣への応募動機を發表してもらい、それぞれで役割分担を決めました。

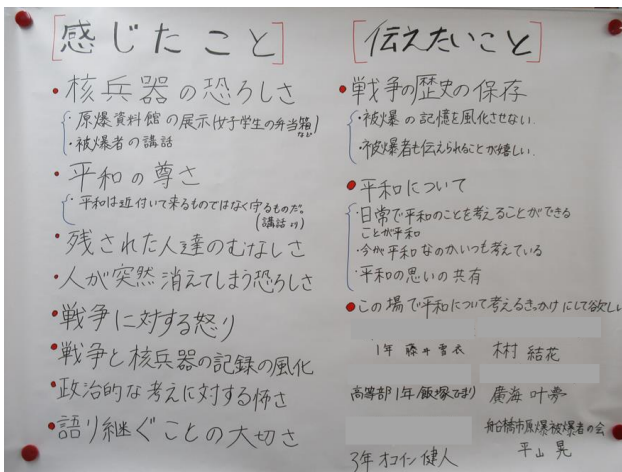
《市長報告会の様子 令和4年8月23日》



派遣者の一人ひとりから、現地で感じたこと、これから「平和の尊さ」を多くの人にそれぞれの立場で広めていきたいという決意などを市長に報告しました。

被爆者の会の方から被爆体験の話があり、市長を交えて平和について話し合いました。

報告会の後、派遣者同士で、今回の派遣事業を通し、具体的にどのようなことを伝えていきたいか話し合い、模造紙をまとめました。



《 平和祈念式典報告 》

1. 概要

式典の正式名称『長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典』は、毎年長崎県長崎市に原爆が投下された8月9日の原爆忌に平和公園で行われる原爆死没者の霊を慰め、世界の恒久平和を祈念するための式典である。

原爆が投下された午前11時02分に長崎の鐘やサイレンを鳴らし、式典会場にのみならず、家庭・職場等原爆死没者の冥福や恒久平和の実現を祈り、1分間の黙祷を行う。式典は原爆死没者の遺族をはじめ市民や一般の方が参列をする。また、長崎市長による平和宣言が行われる。

2. 式典の様子

今年は、新型コロナウイルス感染予防の為取りやめていた一般参列を事前申し込み制で3年ぶりに再会し、約1,700人の規模で実施された。

式典に参列した際、様々な国や地域の方々が献花をしていた。そして、長崎市長、知事、被爆者の方々が平和について語られていた。改めて平和について考えれば考える程とても深いものだと感じた。

そして11時02分には、平和の鐘が1分間鳴り続き皆黙祷をしていた。式典の参列者の中には小中学生、高校生など若い方々も多くみられた。式典の進行も高校生が行い、献水等も小学生から高校生までの人が行っていた。これは次世代にも戦争の悲惨さを伝えて行く為に貴重な機会であり、また平和について考え伝えていくきっかけの1つに必ずなるはずだと思った。

3. 式典を通して学んだこと

式典参列させて頂けたこと自体がとても貴重な体験となりました。

長崎市長の平和宣言を聞いていると、私たちが知らないところで平和に関する様々な取組みが行われている事も初めて知る機会となりました。それらの活動は日本・世界をもっと平和にしていかなければならないという思いで取り組まれていて私は過去に起こった戦争だけを知り、それを後世に伝える事以外にも未来を平和に、そしてより良くしていく為に平和の取組みも知り、その上で自分自身、一人一人が何をしていくべきなのかをもっと考え行動していかないといけないと思いました。

4. 伝えていくべきこと

戦争を知らない人が多くなってきている時代に、私たちはもっともっと戦争の恐ろしさ平和の大切さを知らせていかなければならないと思います。そして、戦争を知って終わりではなく、被爆者たちが経験した被爆のことについても語っていかなければなりません。そして、なによりも自分たちの命のことを重く、大切にしていかなければなりません。尊い命を大切に、と被爆者の方々も言っていたので本当に大切にしていかなければならないと思う中で、今まさにロシアとウクライナの戦争で多くの死傷者が出ています。この戦争が1日でも早く終わる事を願うだけではなく、自分に出来る目の前のことから行動していこうと改めて感じました。

5. 感想

とても貴重な式典参列を通して私は、過去の戦争の事を深く知り、被爆者の想いを伝え、語り継いでいかなければいけないと思いました。そして、唯一の被爆国である日本はもう二度と、戦争をしない、させないことを胸に未来の平和を守るため被爆者たちが、様々な取り組みをしていることを知りました。私はこの取り組みを次は自分達の番だと思い、未来へとバトンを繋げていこうと思います。



(木村 結花)

《令和4年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典式次第》

日時： 令和4年8月9日（火） 10時45分 開式

場所： 平和公園平和祈念像前

10：40 被爆者合唱

10：45 開式

10：46 原爆死没者名奉安

10：48 式辞

10：52 献水

10：54 献花

11：02 黙とう

11：03 長崎平和宣言

11：12 平和への誓い

11：19 児童合唱

11：24 来賓挨拶

11：40 合唱「千羽鶴」

11：45 閉式

《長崎平和宣言》

核兵器廃絶を目指す原水爆禁止世界大会が初めて長崎で開かれたのは1956年。このまちに15万人もの死傷者をもたらした原子爆弾の投下から11年後のことです。

被爆者の渡辺千恵子さんが会場に入ると、カメラマンたちが一斉にフラッシュを焚きました。学徒動員先の工場で16歳の時に被爆し、崩れ落ちた鉄骨の下敷きになって以来、下半身不随の渡辺さんがお母さんに抱きかかえられて入ってきたからです。すると、会場から「写真に撮るのはやめろ！」「見世物じゃないぞ！」という声が発せられ、その場は騒然となりました。

その後、演壇に上がった渡辺さんは、澄んだ声でこう言いました。

「世界の皆さん、どうぞ私を写してください。そして、二度と私をつくらないでください」。

核保有国のリーダーの皆さん。この言葉に込められた魂の叫びが聴こえますか。「どんなことがあっても、核兵器を使ってはならない！」と全身全霊で訴える叫びが。

今年1月、アメリカ、ロシア、イギリス、フランス、中国の核保有5か国首脳は「核戦争に勝者はいない。決して戦ってはならない」という共同声明を世界に発信しました。しかし、その翌月にはロシアがウクライナに侵攻。核兵器による威嚇を行い、世界に戦慄を走らせました。

この出来事は、核兵器の使用が“杞憂”ではなく“今ここにある危機”であることを世界に示しました。世界に核兵器がある限り、人間の誤った判断や、機械の誤作動、テロ行為などによって核兵器が使われてしまうリスクに、私たち人類は常に直面しているという現実を突き付けたのです。

核兵器によって国を守ろうという考え方の下で、核兵器に依存する国が増え、世界はますます危険になっています。持っていて使われることはないだろうというのは、幻想であり期待に過ぎません。「存在する限りは使われる」。核兵器をなくすことが、地球と人類の未来を守るための唯一の現実的な道だということを、今こそ私たちは認識しなければなりません。

今年、核兵器をなくすための2つの重要な会議が続きます。

6月にウィーンで開かれた核兵器禁止条約の第1回締約国会議では、条約に反対の立場のオブザーバー国も含めた率直で冷静な議論が行われ、核兵器のない世界実現への強い意志を示すウィーン宣言と具体的な行動計画が採択されました。また、核兵器禁止条約と核不拡散条約(NPT)は互いに補完するものと明確に再確

認されました。

そして今、ニューヨークの国連本部では、NPT再検討会議が開かれています。この50年余り、NPTは、核兵器を持つ国が増えることを防ぎ、核軍縮を進める条約として、大きな期待と役割を担ってきました。しかし条約や会議で決めたことが実行されず、NPT体制そのものへの信頼が大きく揺らいでいます。

核保有国はこの条約によって特別な責任を負っています。ウクライナを巡る対立を乗り越えて、NPTの中で約束してきたことを再確認し、核軍縮の具体的プロセスを示すことを求めます。

日本政府と国会議員に訴えます。

「戦争をしない」と決意した憲法を持つ国として、国際社会の中で、平時からの平和と外交を展開するリーダーシップを発揮してください。

非核三原則を持つ国として、「核共有」など核への依存を強める方向ではなく、「北東アジア非核兵器地帯」構想のように核に頼らない方向へ進む議論をこそ、先導してください。

そして唯一の戦争被爆国として、核兵器禁止条約に署名、批准し、核兵器のない世界を実現する推進力となることを求めます。

世界の皆さん。戦争の現実がテレビやソーシャルメディアを通じて、毎日、目に耳に入ってきます。戦火の下で、多くの人の日常が、いのちが奪われています。広島で、長崎で原子爆弾が使われたのも、戦争があったからでした。戦争はいつも私たち市民社会に暮らす人間を苦しめます。だからこそ、私たち自らが「戦争はダメだ」と声を上げることが大事です。

私たちの市民社会は、戦争の温床にも、平和の礎にもなり得ます。不信感を広め、恐怖心をあおり、暴力で解決しようとする“戦争の文化”ではなく、信頼を広め、他者を尊重し、話し合いで解決しようとする“平和の文化”を、市民社会の中にたゆむことなく根づかせていきましょう。高校生平和大使たちの合言葉「微力だけど無力じゃない」を、平和を求める私たち一人ひとりの合言葉にしていましょう。

長崎は、若い世代とも力を合わせて、“平和の文化”を育む活動に挑戦していきます。

被爆者の平均年齢は84歳を超えました。日本政府には、被爆者援護のさらなる充実と被爆体験者の救済を急ぐよう求めます。

原子爆弾により亡くなられた方々に心から哀悼の意を表します。

長崎は広島、沖縄、そして放射能の被害を受けた福島とつながり、平和を築く力になろうとする世界の人々との連帯を広げながら、「長崎を最後の被爆地に」の思いのもと、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に力を尽くし続けることをここに宣

言します。

2022年(令和4年)8月9日

長崎市長 田上 富久

令和4年度

長崎市平和式典派遣者報告書

令和4年12月発行

船橋市総務部総務法制課

Tel 047-436-2122

e-mail shisomu@city.funabashi.lg.jp